



昭和50年(1975年)
6月号(No.360)
社団法人 日本山岳会
(J.A.C.)

定価一部 100円

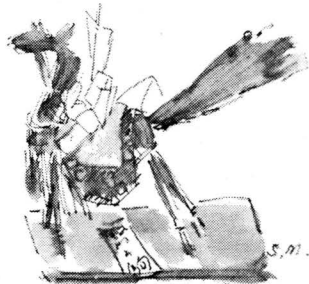
目次

本文・紀行など

- 昭和50年度通常会員総会……(1)
- 定款一部改正、海外登山承認
- 神谷恭氏を偲ぶ会……(2)
- 42年目の八ヶ岳(周布光兼)……(3)
- 山名考・下(山本朋三郎)……(4)

図書紹介

- 屏風岩登攀記(石岡繁雄)……(3)
- 山葵会編『奥美濃』……(4)



カット・松本慎太郎

昭和五十年日本山岳会通常会員総会開催 定款一部改正、海外登山承認

昭和五十年年度通常会員総会は四月二十三日午後六時から東京湯島の第三利根川ビルで百人近い出席者を集めて開かれ、議案は満場一致で承認された。このなかで主なものは、役員の選出、定款一部改正(第六條、一、二項)、また五十年年度事業計画として日印合同ナンド・デヴィ登山計画、当会創立七十周年記念事業があげられる。

総会は今西錦司会長の開会の辞と会務報告のあと、物故者十七人に対して黙祷が捧げられ、引き続き今西会長を議長として本会議に移った。

五十年年度事業計画は板倉勝正常務理事から説明がなされたが、まず、「もうすでに出かけています」「前置きで、海外登山研修会

として、有志が四月二十三日から五月四日まで、ネパール・トレッキングに旅立った旨の説明があった。土産話が期待されるところである。

また五十一年に、日印合同のナンド・デヴィ主峰(七八一六m)と東峰(七四三四m)縦走の計画が進められているが、これについて梶正彦君から説明があり、今年度は六月から五ヵ月にわたって調査のため現地に逐次四人が派遣され、インド側との接衝が終了段階(九月)で正式に人選と計画内容が発表される運びとなっている。

また、高所登山委員会できりとまとめた「高所登山研究」が発刊されることになった。

は望月達夫副会長から説明があり講演会(東京、大阪十月)、集会(各支部単位)、記念晩餐会(年次晩餐会を兼ねたもので、十二月六日、京王プラザ)の了承を得た。また記念出版として「覆刻・日本の山岳名著(大修館)十数冊刊行の準備が島田巽、小林義正、山崎安治、近藤信行の四氏の手で進められていることが明らかにされた。このほか、七十年史編纂に着手されているが、これは今年度内の完成というわけにはいかないとの説明があり、また海外登山援助のための基金設立の準備が行われることになった。

なおこれに先立って、四十九年度事業報告は板倉常務理事から同収支決算が、財産目録以上別掲(伊倉剛三理事からそれぞれ説明がなされた。主な定款改正点と五十年度役員および評議員、監事の通り。

△定款改正▽入会金 七千円

を一万五千元に、▽年会費 五千円を八千五百円に(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県在住会員)、三千五百円を六千円に(その他の国内在住会員)、十二ドルを二十五ドルに(国外在住会員)、▽終身会費 八万円を二十万円(十年以上の在籍会員)、六万円を十五万円に(二十年以上)、五万円を十万円に(三十年以上)、四万円を五万円に(四十年以上)。

理事、評議員、監事については別掲。

最後に柴田均(二秋田)、村上勝太郎(山形代理、藤島玄(新潟)、山本朋三郎(静岡)、大沢伊三郎(山梨)の五支部代表者からの支部活動状況の報告があった。このなかで「明年の支部三十周年行事」(新潟)、「十月の木暮祭(山梨)」、「紅葉会(静岡)」、「二十五周年行事」(山形)としての催しものがあり、各会員への参加呼びかけがあった総会を終了、あとは五百円

会費で懇談に入った。五支部の報告は次の通り(報告順)。

△藤島氏例によってあらためて報告することはないが、新潟支部は二百二十人ぐらいいしたい。来年は支部の三十周年であり、会七十周年もあるもので、五十一年には催しものをいたします。案内いたしますからおいで下さい。

△大沢氏▽五月の木暮祭は有志だけのもので、当支部、県山岳連盟と地元との共催による木暮祭は十月ごろ(未定)に行われる。

昨年からの連峰スカイライン反対運動については、織内信彦氏の来県調査後の記者会見で「日本山岳会も反対」と発表され、大きな反響を呼んでいた。

△山本氏▽長年問題になっていたことだが、山岳会とはなんぞやということがくすぶっている。また関東、関西の大学OBが入会しており、海外へのトレッキングなどに出来る気運が次第に高まってきた。

△村上氏▽山形県在住者会員は四十人だが、支部入会者は二十三人。この際、四十人が一堂に会する意味で小倉董子さんの南米のスライド土産を披露してもらおうと考えている。また日本山岳会七十周年記念事業の支部集会を今西会長の出席で開きたい。

△柴田氏▽秋田山岳連盟と共催で夏山講習会を七月四日から六日まで鳥海山で、ロック・クライミ

ング講習会は十月四、五日男鹿半島で、冬山講習会は明年二月十三日から十五日までそれぞれ行われる。
(片山全平)

総会出席者

山口健児、小原勝郎、森川洋佑、板倉勝正、高山忠四朗、安彦六郎、石田裕康、山崎安治、宮下秀樹、浜野正男、村上勝太郎、浜野吉生、榎有恒、島田 巽、山本健一郎、金坂一郎、中 保、水野公男、今井雄二、千葉保之、朝井一男、小野利次、高遠 宏、大塚博美、片山全平、小林重一、堀田弥一、大沢伊三郎、日下部 憲、橋本 清、松丸秀夫、須田紀子、堀内章雄、梶 正彦、稲山明子、宮原弘之、富田由紀子、川井耿子、棒シゲ子、石田要久、田口二郎、成瀬岩雄、加藤泰安、小林猛臣、外山義夫、村尾金二、浅原重雄、折井健一、伊藤信夫、林 和夫、佐藤久一朗、塩田良仲、柴田均二、小原晴子、菅野弘章、三田幸夫、吉沢一郎、織内信彦、佐藤テル、山本朋三郎、今井友之助、藤島 玄、平塚亀一郎、名須川 浩、中西 章、野口末延、越田和男、伊丹紹泰、小原俊、高橋千鶴子、関口周也、大滝憲司郎、錦織保清、小倉董子、田村俊介、吉武正子、長沢佳熊、神原忠夫、川崎精雄、泉 久恵、大野俊夫、貝森健治、木名瀬 亘、沼倉寛二郎、鈴木郭之、小倉茂雄、神崎忠男、伊倉剛三、関田美智子

黒石恒、今西錦司、望月達夫。
(順不同)

神谷恭氏を偲ぶ会

名児耶 達男

めつきり春らしい陽気となった三月二十九日午後二時から「霧の旅、日本山岳会有志」の人たちによって、「神谷恭氏名誉会」を偲ぶ会」が東京湯島会館で催された。お招きしたのは、ご令聞およびご令息二名のお三人である。私もわずかでもお手伝いをと一時間ほど早く会場に着いた。

やがて神谷家お三人の方も来席され、持参された神谷さん(故会員という文字は用いたくないので、あえて神谷さんと書かせていただく)の、席上にはまことにふさわしい遺影も所定の場所にかざられ、牧野衛さんご持参のヒマラヤの花、その他各種の花も献花され、準備もとのつた。

席上にふさわしい遺影と感じたのは、堅苦しい写真ではなく、幾年か前、雑誌『岳人』主催のある席上で撮られたという写真で、神谷さん独特の、あの右肘を張って盆を口もとに持ってゆかれる、スナップ写真だからである。

追い追いつく方も集まられたので、ほぼ定刻に、山崎安治さんの司会で会が始められた。出席の方は、日高、榎、三田の三名名誉会員をはじめ、霧の旅、日本山岳会

員、みな神谷さんと親交のあったかたばかりで四十三名の多数であった。まず最初に、神谷さんが逝去された時、友人総代となられた永年会員山崎金次郎さんの開会の辞から、会は進められた。続いて日高名誉会員に音頭をお願いして、神谷さんのご冥福をお祈りするとともに、遺族の方のご多幸を願う盃を上げ、後は名司会者山崎さんの適度に出席の皆さんの話しあう時間を、間に入れながら、ご指名の方達が、神谷さんの想い出話しを聞くうちに、会場の雰囲気はだんだんもりあがっていった。

おもしろいことに、色々な神谷さんの想い出話しの中に、かならずお酒のことが出るには、いささか驚いた。勿論、こよなく山を愛され、またお酒も適度にたしなまれた神谷さんであるが、それだけに、いまさらのごとく生前の面影が思い浮かぶのである。なごやかに、そしてたのしい一刻を過ぎていくうちに、制限時間も残り少なくなり、最後に牧野さんが持参された、神谷さんのお元氣なころのお姿を撮影された映画を見せていただくことになった。

その前に、ご長男量平さんから、前記の遺影の説明と、ごあいさつ、続いてご次男恭平さんからのごあいさつがあった後、神谷さんのお元氣なころの、お姿を拝見させていただいた。雪の筑が岳での、若者にまけぬラッセルされるお姿、あるいは金山の木暮さんのレリーフの前での、敬謙なお姿。尊敬する先輩に対される後輩としての、お姿には、まことに胸のうたれる思いがする。

お若い時はいざ知らず、晩年は飄飄としたお姿で、山を歩かれた神谷さん。何回か私もお供をした時の想い出は、幾多あるが、いつも温顔をたたえた、物静かな神谷さんにも珍しい早わざがあった。山行のお供をした帰り、列車に乗る時、列車が混んでいる時ほど、あつという間に姿が見えなくなってしまうのである。最初は一応列

にならんでいるのであるが、列車がホームへ止った瞬間、小身を利用してさつともぐりこむらしいのである。だから私達が車内に入った時には、もうちゃんと席に座っておられるというあざやかさである。私個人の想い出がついてしまったが、それはここでやめて、さて会場では映写を終わり、いよいよ解散となった。あつという間の二時間であった。

それから、神谷家ご三人を会のルームにおさそいして会場を後にした。ルームの談話室はこの日は超満員となったが、お三人に着席していただいた。

この日出席された方には、遠く仙台、新潟、山梨、千葉などから来られた方も多く、神谷さんの人徳のしからしむるところであらう。

ここでは特をぬいでとの先輩のお話があり、ご惠贈のスコッチをいただきながら、ざっくりぼんお話をした、たのしい一刻であった。談笑小時、やがて帰られるお三人とお別れして、私達もボツボツ解散となった。土曜会の出席名簿に、神谷恭の名が記入されなくなって約二年、しかしこの三月二十九日、名簿に神谷さんご遺族三人のお名前が記入されたのは、これがおそらく最初ではなからうか。ともあれ、「神谷恭氏名誉会」を偲ぶ会」は、多数の方のご出席をいただき、なごやかな雰囲気の中で、盛大に行われた。

なお発起人の皆様および、当日カメラ班としてお骨折り願った、松本熊次郎さんのご令息に厚くお礼申しあげます。

▽出席者

日高信六郎、榎有恒、三田幸夫、織内信彦、伊倉剛三、村尾全二、今井雄二、今井喜美子、山崎安治、金坂一郎、渡辺公平、藤井運平、林和夫、島田巽、横山厚夫、村井米子、小野利次、芳野菊子、成瀬岩雄、坂倉登喜子、沼倉寛二郎、伊達寛郎、山村正光、高遠宏、神原忠夫、松本宏、佐藤久一朗、河野幾雄、大野俊夫、名児耶達男、原田幹市、神奈川甚吉、小林幹三郎、鶴岡元之助、松本熊次郎、牧野衛、吉田久兵衛、山崎金次郎、小倉厚、井口正男、神谷かね、神谷量平、神谷恭平
(順不同)

四十二年目の八ヶ岳柳川

周 布 光 兼

しんとすこい冷え込みだった。襖と障子に仕切られた部屋にぼつんと坐った私は、内臓だけが生きているような寒さにぶるっていった。

「こっちでお茶でも飲みませんか。」

救われたような気持で隣室の温いお茶をご馳走になった。たしか農大関係の私より二、三歳年長の二人連れだった。私も自己紹介で信越のスキー合宿が終るや、たまらなくなつて一人であつて来たことを告げた。三人はだんだん熱っぽいの話に包まれて行き、まだ冬天幕や雪洞の実験以前の頃だったが、コブ尾根とかバットレスなどという名称が口にされるたびにその青年達の眼は輝きを増すようになった。

「これだけ広い山域に、年末だつていうのに三人ぼつちなんておかしいな。」とも青年は言った。

翌日私達は、当時の古めいた母屋と湯槽との離れた赤岳鉱泉を後に、中山乗越から行者小屋(当時は一棟の小さい避難小屋であつた)を経て地蔵尾根から稜線に出て赤岳頂上を極めたが、アイゼンは習っていたものの輪カンジキは始めて着ける私を、その青年達は親切にリードしてくれるのだった。再

び急な新雪の尾根を下り行者小屋上のスキーデボからスキーに換え、どうしても年内に帰らねばならない自分はそこで二人の先輩と別れて柳川南沢を、更に美濃戸から上槻木までの長い淋しい高原を一人スキーを走らせたのである。

* * *

それから満四十二年経った今年の三月二十一日の夕刻に、私はまた一人で茅野駅から美濃戸口に下り立っていた。けれどあの遠かった高原も、今度はあつという間のバスだった。それに唐松林が物悲しく唸っていた辺りには、八ヶ岳山荘の大きなロッジが鮮かに人待ち顔で建っていたのだ。

翌早朝、美濃戸の三軒の山荘をきを通って本当に久しぶりに柳川南沢に入ったが、改めてこんなに長い間訪れなかったことが不思議なくらいだった。あの頃の少年時代以後は別の山や地域に夢中になったし、そのうちに戦争参加と以後長らく山登りを離れた期間、それから心の恋人を求めて復活以来はまだ知らなかったところばかり求めて来た身だった。だがこの八ヶ岳柳川あたりには何故か郷愁のように惹かれるものがあつたことを思う。訪ねる人が多くなり、設備も大きく便利になったのは聞

いていたが、心に以前焼き付けられたものは野性の野とか人の気も知らぬ横岳西壁であり赤岳北西側だったのだ。

私はやがて何人もの若い登山者と相前後して行者小屋に着く。そこにも打って変つて大きくなり、暖かそうに煙突から煙を上げる小屋が待ち、数多くのカラフルなキャンプが折りから晴れ渡つて来た広い雪原に散在し、生き生きとした若人が歓談し、阿弥陀岳へのルートや赤岳の尾根上には沢山のパーティが一生懸命に登っているのが望まれた。

実は、愚かな私は、先年復活以後の見果てぬ夢の確認とばかりに横岳西壁の積雪期トラバースのための偵察も目的で来たのである。……それは、大同心・小同心の下縁から、終始左側に絶壁を見て上下しつつ、ずっと南の赤岳寄り迄トラバースするという案であつた。写真で見ると、極度に綿密な計画と存分な訓練を行なえばかなり危険も考えられるが全く可能性がないとも思われなかった。しかし、行者小屋付近と中山乗越及び、これまでカラフルなキャンプ場を従えた立派になった赤岳鉱泉周辺からブリズムなどで二時間も偵察したあげくは、残念ながらこの年輩でアタックするなど「とても、とても」という結論に到達したのである。

かった。赤岳鉱泉でコップェルを沸かし、今度は柳川北沢の雪路をのんびりと降った。
楽しい早春の山旅であつた。それまで持っていたイメージとは異なり、カラツとした、ちょうど振



屏風岩登攀記

石岡 繁雄 著

著者もあとがきで「発行部数が少なく稀覯本となつてゐる」と書いているように「屏風岩登攀記」(昭和二十四年六月刊)はJACの図書室の蔵書にもなく、うわさには聞いていたが本を手にとって読んでみる機会もなかったが、今回装いも新たに同名の本書が再出版された。

本書は昭和十二年の記録から始まり、著者の半生の山行記ともいふべきものであつて、屏風岩登攀のほかに前後のいくつかの記録が納められている。いずれも戦中および敗戦直後の登山界を知る資料の一つとなつてゐるが、全頁の半分を占める第Ⅱ部「屏風岩登攀記」が中心となつてゐる。

り返つて輝く八ヶ岳の全容のようになさっぱりとした思いが胸中を占めていた。
八ヶ岳自体は、ちょっとやそつとの年月では、少しも変つてゐなかつたのである。

ので、どのように加筆されたのか著者があとがきに書いている位しか判らず比較できないが、その大部分は登攀に至るまでの経過、なかなか後輩伊藤洋平氏との関係であらう。

昭和十九年の春、伊藤洋平氏のひらめき「屏風の岩壁の傾斜は七十度はあるだろう。常識からすればそのような急斜面の壁には氷雪はつかないはずだ。それなのに相当な範囲にわたつて、しかも大量な氷雪がくっついてゐるのはどうしてだろうか」から、当時登攀が不可能とされて来た屏風岩の弱点をさがしとめ、登攀中はザイルのもつれから岩壁の真中に一人残り、あてもない救助を待ち続けながら、ついに中央壁を登り切つた。この壁に寄せるすさまじいばかりの執念が書かれてゐる。

昭和十九年十月の伊藤氏等の屏風岩登攀を祝つて、なけなしの酒を傾けて大いに気炎をあげたのであつたが、著者は話を聞いただけでルード図や写真の上で確認を疑いを抱くようになり、このことから互いに袂を分かち、それぞれの

やり方で岩壁にいどむことになる。袂を分かちながらも岩壁の中で救助を待つ間も著者は伊藤氏等による救助を期待し、来るだろうが来ないだろうかと反すうしている。このようなところは綿密な計画とはげしい執念でせまってくる中にも、うれしさのあまりうっかりしたり、旧友に対する心の葛藤があったりで楽しませてくれる。本書は登山史上に残る記録として屏風岩に関心を持たれる登山者にとつて一読すべき文献といえるであろう。

(昭和四十九年十月、碩学書房刊、B6版、三九六頁、千円)

(堀内章雄)

山葵会編

『奥美濃』

山葵会というのは、JAC岐阜支部の有志でつくっている会のようだ。その人々がこんど奥美濃の山の本を出された。曾て岐阜大に

おられた今西錦司氏は、このグルーブと奥美濃の山々に数多く登ったことは仄聞していたが、本書のなかにも、そのことが諸所にうかがえる。

序文のなかで今西さんは「京都北山は、私の揺籃の山である。――中略――奥美濃にはまた奥美濃のよさがあり、北山同様、愛着は絶ちがたい。というのはいずれも登山のための人工があまり加えられていないということである。したがってもし、こういう山に登ろうとするとときは、たとえ標高が低くても、眼も耳も鼻もとぎすまされないように鋭敏でなくてはならない。そうすることによって山が語りかけてくる言葉を識ることができるともある」とそれが北山にも奥美濃にもあるということである」と書いておられるが、海外の山々にも足跡の広い同氏から、こういう言葉をきくのは格別の意味がある。また半世紀も前の今西さんの

奥美濃紀行が収載されているが、一読実に興味深い。

本書は単なる案内書ではないがその役にたつことも事実で、それ以上にこの山城をこよなく愛している岐阜岳人の息吹きを感じさせてくれる。採り上げられた山は盟主能郷白山ほか六十余座に及ぶ。私は曾て早春の一日、南信の大川入山頂から木曽御嶽の左方に延々と続く純白な山波を認め、あああれが『樹林の山旅』の著者などが徘徊した山々かと、心をひかれた覚えがある。同じ思いをいだいている人も少なくなろう。そういう人々には欠くことの出来ない本である。

造本もすっきりしていて佳作、欲を言えば山村民俗に関係ある写真などをもう少し入れてほしい。た。(四六判三八二頁、写真九葉略図多数、一九七五年二月十五日山葵会発行、頒価一八〇〇円)

(望月達夫)

いたであろう。

超自然の恐ろしい光景は、現代のわれわれでは想像もできない恐怖であり、原始的な信仰で説明し納得せざるを得なかったであろう。紀元前四千年ほど前にバビロニアに世界最古の記録が生じたといわれているこの時代、中国にもまだ文字はなく、日本では、二千年ほど前、やつと中国の文献に日本の前身と思われる、倭国の記事が断片的に現われたにすぎない。

もちろん日本には文字がなかった。しかしながら、語り言葉はあり、口伝として何等かの意味合いを現代にまで残している言葉は考えられる。古代に遡るほど人間は強い慣習の絆に縛られ、言葉が多の場合、文化と複合しているのは自然である。日本の古文獻を読むと母系的結婚風習、巫子、太陽神崇拜、神話の内容、神の觀念など、古代日本文化に見られる南方的要素は、時代が遡るほど濃い。三世紀以降の日本語は朝鮮・中国を含めたアルタイ語的言語であるが、このアルタイ語的言語のみからは日本の古代文化なり、言葉の解明に不十分である、文字以前の日本語には南方的要素がかなりあるであろうことは、生活様式文化に、現代においても南方的要素があまりにも多いことでもうなずかれる。富士山を表わす名前が『日本山岳志』によれば三十余あり、丹念に調べれば百前後ある、

とのことである。わが国で最初の富士の文字は、奈良時代の『常陸風土記』の筑波の条に、福茲岳とある。ついで『万葉集』で、布士能高嶺、不尽能高嶺、不自能婆夜麻、布時能夜麻、といくところもある。三番目に古いのは、弘仁三年薬師寺の僧、景戒の『日本国現報善惡靈異記』(八一〇年)に富紙厳とある。時代が下るにしたがって詩文には、不二、不死、不時、富児などいろいろに使われている。

富士の語源は昔から種々試みられ、中で一番もっともと思われるのは、火や噴火の勢の有様をも意味する、火ということであろう。すなわち、噴火、吹く、輔、の発音は、元来、口をとんがらせて息を吹きだしながら発音するものである。この息を吹く発音から説明したのが、江戸時代、松屋興清が『棟梁記』の中で、吹息穴「フジナ」の転音と書いている。

木暮理太郎氏によれば、アイヌ語のカムイ・フチは火の神の意味であり、南方系のアサマも火の山を意味するものである。アイヌ語のフチと、南方系のアサマが並んで一つの山をよぶ名となり、アイヌよりも優勢であった南方系のアサマがこの山の神の名になり、アイヌ語は単に山の名として残ったものという。アサマに浅間の文字が当てられセングンと音読され富士浅間神社となった。御殿場市内で発掘された縄文時代の土器が、

山名 考△下▽

山名の由来

山本朋三郎

富士山

富士山麓御殿場市深沢字丸岳の、山の神遺跡はゴルフ場造成工事中に発見され

た。地層の十六層のうち十三層は富士噴火の火山灰で、地表三・三mの地下より、五―七千年前の縄文土器が掘出された。この付近の馬の背遺跡、丸岳遺跡、永尾東遺跡など出土品は富士山がほぼ現在の山容になる前か、古富士のあった頃の古い縄文時代のもので、関東の諸磯式にみられる、半截竹管でつけた沈線文と、関西の北白川下層式と同じ薄手の舟型文のある

ものもあり、両地方の影響が見られる。このことを考えてもわれわれが想像する以上に、当時の東西の交流は濃かったことを物語っている。

以後、富士の噴火で東西の交流が断たれ生活圏を移動せざるを得なくなったものであろう。富士火山灰のため、地中深く埋没されたこれら土器を使っていた、縄文人達は噴火する富士をなんと呼んで

いたであろう。

超自然の恐ろしい光景は、現代のわれわれでは想像もできない恐怖であり、原始的な信仰で説明し納得せざるを得なかったであろう。紀元前四千年ほど前にバビロニアに世界最古の記録が生じたといわれているこの時代、中国にもまだ文字はなく、日本では、二千年ほど前、やつと中国の文献に日本の前身と思われる、倭国の記事が断片的に現われたにすぎない。

もちろん日本には文字がなかった。しかしながら、語り言葉はあり、口伝として何等かの意味合いを現代にまで残している言葉は考えられる。古代に遡るほど人間は強い慣習の絆に縛られ、言葉が多の場合、文化と複合しているのは自然である。日本の古文獻を読むと母系的結婚風習、巫子、太陽神崇拜、神話の内容、神の觀念など、古代日本文化に見られる南方的要素は、時代が遡るほど濃い。三世紀以降の日本語は朝鮮・中国を含めたアルタイ語的言語であるが、このアルタイ語的言語のみからは日本の古代文化なり、言葉の解明に不十分である、文字以前の日本語には南方的要素がかなりあるであろうことは、生活様式文化に、現代においても南方的要素があまりにも多いことでもうなずかれる。富士山を表わす名前が『日本山岳志』によれば三十余あり、丹念に調べれば百前後ある、

とのことである。わが国で最初の富士の文字は、奈良時代の『常陸風土記』の筑波の条に、福茲岳とある。ついで『万葉集』で、布士能高嶺、不尽能高嶺、不自能婆夜麻、布時能夜麻、といくところもある。三番目に古いのは、弘仁三年薬師寺の僧、景戒の『日本国現報善惡靈異記』(八一〇年)に富紙厳とある。時代が下るにしたがって詩文には、不二、不死、不時、富児などいろいろに使われている。

富士の語源は昔から種々試みられ、中で一番もっともと思われるのは、火や噴火の勢の有様をも意味する、火ということであろう。すなわち、噴火、吹く、輔、の発音は、元来、口をとんがらせて息を吹きだしながら発音するものである。この息を吹く発音から説明したのが、江戸時代、松屋興清が『棟梁記』の中で、吹息穴「フジナ」の転音と書いている。

木暮理太郎氏によれば、アイヌ語のカムイ・フチは火の神の意味であり、南方系のアサマも火の山を意味するものである。アイヌ語のフチと、南方系のアサマが並んで一つの山をよぶ名となり、アイヌよりも優勢であった南方系のアサマがこの山の神の名になり、アイヌ語は単に山の名として残ったものという。アサマに浅間の文字が当てられセングンと音読され富士浅間神社となった。御殿場市内で発掘された縄文時代の土器が、

関東、関西の両系統の影響をもっているのと、併せ考えるとあらずける。

天城山

日本の島にフォッサ・マグナのできた頃には、まだ富士山もできておらず、伊豆半島ももちろん海上にはできていなかった。諸学説を基に、想像をたくましくしてみると、静岡県東部の東部は、富士川から神奈川県の酒匂川辺りを結ぶ五十Kmほどの、大きな湾が甲府盆地を洗う、その西南岸に相当していた。約百万年位前の想像である。この湾の海上遙かに猫越岳の頂上が小島として浮んでいた。時代は下り、フォッサ・マグナ地帯に海底火山が相つぎ、箱根山、愛鷹山、古富士、八ヶ岳、妙高などが噴火した。この富士火山脈に属する地帯に相ついで熱海火山、達磨山火山、天城火山が爆発、伊豆半島の原型を作った。暫くして、富士噴火が古富士を埋め、三原山の噴火の頃伊豆七島ができた。この間の地殻変動で伊豆の溶岩流が東西海岸で大陥没を起し、ほぼ現在の断崖状の海岸線を創った。

この半島の主峰の天城山は単独の一峯の名称ではない。賀茂、田方の郡境に壁のごとく連なる火山群峰の総称である。天城山の火口は直径約七Km、笥木山、萬二郎岳、萬三郎岳、池の西、八丁池、三筋山の線を結んだほぼ円型の火

口である。白田山は中央火口岳である。側火山を十五もつ。遠笠山、矢筈山、大室山、小室山は主な側火山である。

天城山の名のおこりに諸説があつて決定的な語源がない。天城と書いてアマギと現在読みである。天は本来、アメが正しい。これに他の字が続くとアマと発音する。天水「アマミズのごとく。天とは青々と空高いさま、あるいは雨水という意味がある。城はキである。この文字の配列から山名は「 Γ 」広々とした空に高く抜きでた城のような姿、「 Δ 」天を雨の借字と考え、雨の多い高い山、と考えられる。天城連峰は太平洋からの暖気流をまともに受け止める、多雨地域である。

別の語源。昔はこの山に甘木「カン草が生え繁つており、この甘木「アマギを奈良時代に美麗な天城の文字に仮借したとの説である。天城とはいつ、誰が名付けたのか判らない。

重々とした折重なるような天城の山波は、単調な富士山や、低い丹沢の山、田尻の浦の背後の山々に比べれば、海岸の断崖から突起したような天城の連峰は、幅広く、強靱な城のようにみえる。天城山をみて名付けた昔の人が、北方からの人種であれ、黒潮に乗ってやってきた南方系か、また、馬に乗って陸地を通ってきた人種であれ、天城は「天にそびえる城」のよう

に行手にはだかつていたと思う。

玄岳

玄「クロ、とは黒と異った意味がある。黄色がかった黒色、天「アメ、奥深く静かなさま、北方を指す、といった意味をもつ。玄人「クロウト、玄理「ゲンリ、玄天「ゲンテン、玄武「ゲンブ、などと使われる。

伊豆田方の平野からせり上つてみえる玄岳の名の起りは文字からは解明し難い。現在の富士山がまだ現出していなかった太古、古富士と箱根、愛鷹山に挟まれた、高原状の台地は古代人のよき生活圏であつたと思われる。この頃、現在の沼津や三島の平坦地はまだ海中にあった。その、熱海、達磨、天城の火山爆発と陥没で、ほぼ今日の伊豆半島ができた。できたての伊豆半島と異なり、古富士、箱根、愛鷹には植物が繁り、小動物も多く生息していたであろう。古代人のユートピア園であつたろう。

古代人達はその後、富士噴火の火山灰で何層にも埋められる運命となり、箱根の裾野伝いに、函南、韮山方面へと移住せざるを得なかったであろう。当時、沼津、三島は堆積土少なく、水路も定まらず、沼地多く縄文人の居住先は玄岳や日金山の山麓帯と考えられる。火の使用、したがって、断えぬ火を保つ燃木をたやすく得られる地点は、居を構える重大な条件の一つである。肥沃な田方平野もま

だ野川の氾濫で落着かず、彼等は当然、玄岳や日金山を背にした、南傾面の山麓に居を構えたと考えられる。この山麓は傾斜もゆるく燃木は手近かにあり、小動物も生息しており、また、川、海にも近いので、狩猟・漁撈の理想的台地であつたろう。

「倭名抄」に、釣樟、樟樹、梓、橡、樺、これらをみなクヌギと読ませてある。このクヌギというのは列挙した文字のごとく、一定の樹木を指したものでない。また、クヌ「クと、キは同意語に用いられており、とくに燃木「薪にのみクといつていたようである。この燃木「薪を使う電戸をクドという。岐阜県ではクドはいりりのことである。秋田辺りでは焔炉「しちりん、新潟県では火の燃えているところ、を指す。かようにクド「クとは燃木「薪を広く意味していることが判る。

柳田国男氏の地名雑考によれば、全国地名の、久野鵜、久木、国木、梶田、柊木、久原、久野、久沢、久土、久場、久平などはみな、燃料採集地を意味するとのことである。

地質学的に玄岳は熱海火山の火口壁の山頂である。すなわち、玄岳、日金山、伊豆山、を結ぶ楕円型の火口をもつ熱海火山が、地殻変動、断層陥没などで熱海湾ができ、玄岳はあたかもそれ自体の突出した山のようにみえる。現

在の熱海市は火口壁内なのである。徳川時代の古文書に熱海湾の「海湧き魚死す」などと書かれてあるも当然である。この熱海火山の南麓の斜面台地に住んだ縄文時代人から、弥生時代そして律令時代へと口伝された薪木「ク木をとる山としての玄岳が伝世したと考えたい。

クノ木岳がクロキ岳と音変し、さらにキが除かれて、クロ岳となり、後世、玄の文字が当てられ、玄の文字のもつ、奥深く静かな山と掛合わされた山名と考えるはあまりにも文学的にすぎるか。(完)

訂正

「山」4月号、田辺主計氏の文章中、4ページ3段8行目を次のように訂正します。

(誤)「人に人を捨てさせる」
(正)「人に命を捨てさせる」

係から

「山」に原稿をお寄せくださる方が最近とみに多くなって、係ではうれしい悲鳴をあげています。お寄せいただいた原稿はなるべく早い機会に収録するように努力いたしますが、掲載順が前後することがありますのでご諒承下さい。また、「山」は、なるべく多くの方の文章を収録したいと存じますので、原稿はあまり長文にならないよう四〇〇字五枚を最高限度の目安とお考え下さい。締切りは発行月の前々月末です。

昭和49年度日本山岳会収支決算書

自 昭和49年4月1日
至 昭和50年3月31日

1. 総括表

区 分	歳 入 決 算 額	歳 出 決 算 額	差引残高	差引残高の処理	
				基本財産 へ編入	翌年度へ 繰越
一般会計	23,940,412	23,465,558	474,854		474,854
別途会計	6,622,000	370,000	6,252,000		6,252,000
(基本財産編入引当金)		(1,490,000)	(1,490,000)		(1,490,000)
(別途会計編入引当金)		(3,085,000)	(3,085,000)		(3,085,000)
合 計	30,562,412	23,835,558	6,726,854		6,726,854

2. 一般会計(歳入)

科 目	予 算	決 算	増 減(△)
経 常 収 入	13,000,000	14,473,480	1,473,480
入会費	1,000,000	1,491,000	491,000
入会費	12,000,000	10,343,594	△ 220,815
年会費		1,435,591	773,295
終身会費		773,295	430,000
事業収入	6,200,000	3,195,960	△3,004,040
山岳会費	1,500,000	809,700	△ 440,300
山岳会費		250,000	△ 20,000
山岳会費	400,000	380,000	△ 20,000
山岳会費	4,000,000	1,322,490	△2,677,510
山岳会費	300,000	433,770	133,770
雑収入	1,130,000	963,998	△ 166,002
利息	300,000	239,064	△ 60,936
山岳会費	500,000	500,000	0
山岳会費	30,000	14,000	△ 16,000
山岳会費	300,000	184,434	△ 115,566
山岳会費		26,500	26,500
未収金	2,200,000	964,636	△1,235,364
山岳会費	2,200,000		
山岳会費		330,000	
山岳会費		589,500	
山岳会費		45,136	
山岳会費		1,810,000	1,810,000
山岳会費		1,660,000	
山岳会費		150,000	
小 記	22,530,000	21,408,074	△1,121,926
前年度繰越	2,532,338	2,532,338	
合 計	25,062,338	23,940,412	△1,121,926

(歳出)

科 目	予 算	決 算	増 減(△)
運 営 管 理 費	12,501,000	11,282,453	△1,218,547
手文印交	3,000,000	2,652,640	△ 347,360
手文印交	100,000	65,880	△ 34,120
手文印交	860,000	799,301	△ 60,699
手文印交	760,000	698,980	△ 61,020
手文印交	2,220,000	1,341,861	△ 878,139
手文印交	4,096,000	4,095,840	△ 160

料 費 費 料	65,000	76,700	11,700
料 費 費 料	150,000	238,080	88,080
料 費 費 料	70,000	107,265	37,265
料 費 費 料	180,000	258,811	78,811
料 費 費 料	170,000	146,389	△ 23,611
料 費 費 料	50,000	17,330	△ 32,670
料 費 費 料	150,000	136,820	△ 13,180
料 費 費 料	30,000	18,000	△ 12,000
料 費 費 料	100,000	91,605	△ 8,395
料 費 費 料	320,000	377,200	57,200
料 費 費 料	30,000	34,000	4,000
料 費 費 料	150,000	125,751	△ 24,249
事 業 費	9,195,000	5,401,185	△3,793,835
出版費	6,830,000	3,804,712	△3,025,288
出版費	200,000	207,460	7,460
出版費	700,000	535,000	△ 165,000
出版費	385,000	364,373	△ 20,627
出版費	100,000	22,000	△ 78,000
出版費	300,000	11,670	△ 288,330
出版費	300,000	170,000	△ 130,000
出版費	380,000	285,950	△ 94,050
予 備 費	1,000,000	276,940	△ 723,060
資本財産編入引当金	1,000,000	1,490,000	490,000
その他引当金		575,000	575,000
仮 払 金		1,930,000	1,930,000
別途会計編入		700,000	700,000
預 り 金		1,810,000	1,810,000
小 計	23,696,000	23,465,558	△ 230,442
次年度繰越	1,366,338	474,854	△ 891,484
合 計	25,062,338	23,940,412	△1,121,926

3. 別途会計(編入内訳)

科 目	繰 越	歳 入	歳 出	翌年度繰越
終身会費	1,500,000	430,000		1,930,000
終身会費	157,000	100,000		257,000
終身会費	20,000	20,000		40,000
退職給与	150,000	150,000	150,000	150,000
合 計	1,827,000	700,000	150,000	2,377,000

4. 引 当 金

科 目	繰 越	歳 入	歳 出	翌年度繰越
基本財産編入引当金		1,490,000		1,490,000
基本財産編入引当金		300,000		300,000
基本財産編入引当金		100,000		100,000
基本財産編入引当金		140,000		140,000
基本財産編入引当金		35,000		35,000
基本財産編入引当金	120,000		120,000	0
基本財産編入引当金	100,000		100,000	0
合 計	220,000	2,065,000	220,000	2,065,000

5. 預 り 金

科 目	繰 越	歳 入	歳 出	翌年度繰越
海外登山研修費		1,660,000		1,660,000
山日記広告料		150,000		150,000
合 計		1,810,000		1,810,000

昭和五十年年度通常会員総会	三、二五一名
出 席	九二名
委 任	一、〇三六名
合 計	一、一八四名
法定数	一、〇八四名
昭和49年度事業報告	
登山の指導と奨励に必要な集会、講習会および展覧会の開催	
(イ) 集 会	
四月二二日 支部長会議	
五月二〇日 第三〇六回小集会	
カンジロバ登山隊報告会 講師	
北里大学 河村栄二氏(本 会)	
六月一日(二日) 第二八回ウエストン祭	
六月三日 地図の会の集り(上高地)	
七月六日 講演会 講師 榎有恒氏	
八月八日(九日) 第三〇七回小集会	
中部地区支部懇親会(鉄舟寺)	
八月二二日 第三〇八回小集会	
エレベスト南壁報告会	
講師 湯浅道男氏(岸体育館)	
八月三〇日 第三〇九回小集会	
女性マナスル登山隊報告会	
講師 黒石 恒氏(岸体育館)	
九月二日 J・ダンシース女史を囲む会	
九月一〇日 第三一〇回小集会	
ジャスリ報告会(本 会)	
九月一五日(一六日) 第三一一回小集会	
支部懇談会(上高地)	
九月一八日 山岳図書を語る夕べ	
九月二〇日 第三一二回小集会	
日大ヤルンカン登山隊報告会	
講師 島海昭二郎氏(本 会)	
九月二四日 中華民国山岳協会一行歓迎会(本 会)	

財 産 目 録

昭和50年3月31日現在

1. 基本財産

種 類	預 入 先	金 額
貸 付 信 託	日本信託銀行本店	1,080,000

2. 運用財産

1) 保 証 金

種 類	預 入 先	金 額
保 証 金	㈱利根川商事	7,314,000

2) 現金および預貯金

種 類	預 入 先	金 額
現 金		407,074
普 通 預 金	三和銀行本郷支店	2,797,189
	協和銀行神田支店	198,707
	東京銀行本店	18,812
	八十二銀行松本文店	58,272
定 期 預 金	協和銀行神田支店	2,000,000
"	三菱銀行神田橋支店	1,000,000
金 銭 信 託	日本信託銀行本店	95,271
振 替 預 金	東京振替貯金課	151,529
合 計		6,726,854

3) 建 物（上高地山岳研究所）

場 所	長野県南安曇郡上高地国有林114
構 造	鉄筋コンクリート造（一部木造）1棟 109.35m ²

4) 未収金、仮払金

摘 要	金 額
前 年 度 未 収 金	2,200,000
歳 入 決 算 額	△ 964,636
刊 行 物 売 上 未 収 金	1,061,880
仮 払 金	1,930,000
差 引 合 計	4,227,244

5) 刊行物、服飾品棚卸現在高

摘 要	金 額
刊 行 物（山岳、山岳覆刻版等）	1,956,197
服 飾 品（ネクタイ等）	314,680
合 計	2,270,877

6) 図 書

種 類	摘 要	冊 数
和 書	（49年度受入冊数144冊）	3,255 冊
洋 書	（ ” 9冊）	1,268 冊

7) 什 器 備 品

宛名カードケース（1）、新刊書ケース（1）、セフネス金庫（1）、宛名印刷機（1）、ローヤルタイプライター（1）、電話（1）、スライドプロジェクター（1）、雑誌棚（4）、折りたたみ椅子（47）、机、テーブル（17）、スチール黒板（2）、両開書庫（8）、ファイリングキャビネット（6）、マップロッカー（1）、コンパクト移動書庫（4）、キーパー引違書庫（2）、移動式踏台（1）、スチール書架（4）、組立用本棚（1）、スクリーン（1）、電気掃除機（1）、ホールスタンド（3）、手提金庫（1）、複写機（1）、タイプスタンド（2）、電気冷蔵庫（1）、応接セット（1）、湯沸器（1）、折りたたみ運搬車（1）、パンチカードケース（1）、耐火金庫（1）、テープレコーダー（1）、卓上電算機（1）、ワゴン（1）、工具一式（1）、十字袋（6） 49.11 購入

8) 絵 画

・北穂高岳滝谷（足立源一郎、油—25） ・北穂高岳主峯（足立源一郎、油—25） ・或朝の槍ヶ岳（足立源一郎、油—25） ・槍ヶ岳（足立源一郎、油—P 8） ・群猿（石井鶴三 墨絵） ・鳥（石井鶴三、墨絵）
 ・徳本峠から穂高連峰（石田吟松、墨絵） ・富士山麓（茨木猪之吉、油—A25） ・伊豆半島（茨木猪之吉、油—10） ・針之木峠（茨木猪之吉、油—10） ・初冬の両神山（茨木猪之吉、油—10） ・モンブランメールドグラス（シュラギットワイト、エッチング） ・北岳（高遠 宏、版画）
 ・白馬岳（中村清太郎、油—A50） ・田代池の白樺（中村清太郎、油—変型6） ・後立山連峯（中村清太郎、水彩） ・槍ヶ岳初夏（中村清太郎、油—10） ・ユングフラウ（山里寿男、油—10） ・潤沢より北穂高（山里寿男、水彩—6） ・カンチェンジェンガ（矢崎千代子、パステル画） ・プカヒルカノルテ（渡辺九郎、水彩）

- ・（ハ）五月一七日～一九日 第一四回登山講習会
- ・（ロ）六月二九日～三〇日 第六回高所登山研究会（谷川岳）
- ・九月二四日 カラコロム・ヒンズークシュ研究会 講師 吉沢一郎氏
- ・（ハ）三月一五日 第三一八回小集会マルチュリ登山隊報告会 講師 青山学院大学 戸張至聖氏（本会）
- ・三月一五日 第三一九回小集会昭和四九年度入会者オリエンテーション（第三利根川ビル）
- ・三月一五日 山岳史懇談会 松高山岳部を語る 講師 今井田研二郎氏（本会）
- ・（ロ）二月二〇日 第三一六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一七回小集会スキー親睦会（八方尾根）
- ・二月二三日 映画会「マナスの白い影」（本会）
- ・二月二〇日 第三一八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一五回小集会モチツキ大会（高尾山）
- ・二月二〇日 第三一四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一一回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一〇回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第九回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第八回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第七回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第六回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第五回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第四回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第三回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第二回小集会忘年会（本会）
- ・二月二〇日 第一回小集会忘年会（本会）

昭和 50 年度日本山岳会収支予算

1. 総括表

自 昭和50年4月1日
至 昭和51年3月31日

区 分	歳 予 算 入 額	算出予算額	差引残高	残 高 の 処 理	
				基本財産 へ 編 入	翌年度 へ繰越
一般会計	31,652,098	28,571,000 (1,950,000)	3,081,098	(1,000,000)	3,081,098
別途会計	6,252,000	3,875,000	2,377,000	1,490,000	2,377,000
合 計	37,904,098	32,446,000	5,458,098	(1,000,000) 1,490,000	5,458,098

2. 一般会計（歳入）

科 目	予 算	前年度予算	増 減(△)
経常収入	20,950,000	13,000,000	7,950,000
入金	1,950,000	1,000,000	950,000
入会費	19,000,000	12,000,000	7,000,000
年会費			
過年度会費			
次身會費			
終身會費			
事業収入	4,800,000	6,200,000	△1,300,000
山岳報告料	1,500,000	1,500,000	0
山岳印告	400,000	400,000	0
山刊行物売上	2,500,000	4,000,000	△1,500,000
その他事業収入	500,000	300,000	200,000
雑収入	1,100,000	1,130,000	△ 30,000
利息	300,000	300,000	0
山岳診療助成金	500,000	500,000	0
貸室材料		30,000	△ 30,000
その他の雑収入	300,000	300,000	0
未収金	4,227,244	2,200,000	2,027,244
過年度未収金	1,235,364	2,200,000	△ 964,636
仮払金	1,930,000		1,930,000
刊行物売上未収金	1,061,880		1,061,880
小計	31,177,244	22,530,000	8,647,244
前年度繰越	474,854	2,532,338	△2,057,484
合 計	31,652,098	25,062,338	6,589,760

△未 弘 金

摘 要	金 額
刊 行 物 出 版 費	1,812,000
合 計	1,812,000

(歲出)

科 目	予 算	前年度予算	増 減 (△)
運 營 管 理 費	12,596,000	12,501,000	95,000
手 文 具 費	2,700,000	3,000,000	△ 300,000
印 刷 費	100,000	100,000	0
交 通 費	850,000	860,000	△ 10,000
家 保 費	800,000	760,000	40,000
營 諸 光 電 會 費	2,200,000	2,220,000	△ 20,000
業 稅 會 費	4,096,000	4,096,000	0
出 國 調 査 費	80,000	65,000	15,000
圖 書 研 究 費	250,000	150,000	100,000
指 導 關 係 費	120,000	70,000	50,000
海 外 諸 國 發 行 費	300,000	180,000	120,000
周 年 記 念 費	170,000	170,000	0
本 所 他 產 業 費	50,000	50,000	0
基 本 費	150,000	150,000	0
小 次 年 度 計 劃	30,000	30,000	0
合 計	100,000	100,000	0
運 營 管 理 費	400,000	320,000	80,000
手 文 具 費	50,000	30,000	20,000
印 刷 費	150,000	150,000	0
交 通 費	10,213,000	9,195,000	1,018,000
家 保 費	6,738,000	6,830,000	△ 92,000
營 諸 光 電 會 費	320,000	200,000	120,000
業 稅 會 費	880,000	700,000	180,000
出 國 調 査 費	535,000	385,000	150,000
圖 書 研 究 費	100,000	100,000	0
指 導 關 係 費	400,000	300,000	100,000
海 外 諸 國 發 行 費	300,000	300,000	0
周 年 記 念 費	440,000		440,000
本 所 他 產 業 費	500,000	380,000	120,000
基 本 費	1,950,000	1,000,000	950,000
小 次 年 度 計 劃	1,812,000		1,812,000
合 計	2,000,000	1,000,000	1,000,000
運 營 管 理 費	28,571,098	23,696,000	4,875,098
手 文 具 費	3,081,098	1,366,338	1,664,760
印 刷 費	31,652,098	25,062,338	6,539,760

3. 別途会計

科 目	歳入予算	歳出予算	差引残高	翌年度へ繰越
別 途 積 立 金				
前年度からの繰越	2,377,000		2,377,000	2,377,000
小 計	2,377,000		2,377,000	2,377,000
引 当 金				
前年度からの繰越	2,065,000	2,065,000	0	0
小 計	2,065,000	2,065,000		0
預 り 金				
前年度からの繰越	1,810,000	1,810,000		0
小 計	1,810,000	1,810,000		0
合 計	6,252,000	3,875,000	2,377,000	2,377,000

- 1 技術講習会 (谷川岳)
 - ・八月一日〜一七日 穂高沢沢デン
 - ・ト集会 (涸沢、上高地)
 - 2 展覧会
 - ・二月七日 この一本展 (京王プラザホテル)
 - 3 登山施設の改善その他登山のための適切な事業
 - ・上高地山岳研究所を六月一〇日より開所、集会、青年懇談会、婦人懇談会による研究会を開催した。
 - ・山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
 - ・各大学医学部山岳部による夏山診療所開設七月〜八月(槍ヶ岳、五色沼、唐松、三俣山荘、白馬岳、合戦小屋、立山、尾瀬)
 - 4 自然保護活動
 - ・山梨県の「連峰スカイライン」計画に対する反対運動の推進と、国立公園内における山岳地の自然保護への協力
 - 5 海外登山の指導
 - ・海外登山に於ける無事故登山を目的に適切な指導を行なう
 - ・機関誌などの発行
 - ・(イ)「山岳六八年」二月発行
 - ・(ロ)会誌「山」第三四六号〜三五七号発行
 - ・(ハ)「山日記」一九七五年版一月発行
 - ・(ニ)「山岳」覆刻版第三年二号発行
 - ・(ホ)蔵書目録発行
 - ・(ヘ)この一本展目録発行
 - ・(コ)目的を同じくする外国団体との情報交換
 - ・(カ)三〇ヶ国六〇団体と情報を交換した
 - ・(キ)JIAA総会に会員牧野文子、神原達が出席した。七月一日〜七日(ニュゴスラビア・デルニツェ)
 - 6 昭和50年度事業計画
 - ・登山の指導奨励に必要な集会・研究会・講習会の開催
 - 7 集 会
 - ・小集会(報告会、シンポジウム)毎月二〇日および随時
 - ・ウェストン祭 上高地 六月一日
 - ・山岳図書を語る夕 本会
 - ・山岳史懇談会 本会
 - ・山岳図書交換会 本会
 - ・来日外国登山家との交歓
 - 8 研 究 会
 - ・高所登山研究会 於東京、名古屋 五〜三月隔月
 - ・雪崩シンポジウム 一〇月
 - ・(イ)講習会
 - ・海外登山研修会 於ネパール・ヒマラヤ山麓 四月二三日〜五月四日
 - ・技術講習会 谷川岳 五月二四日、二五日
 - 9 展 覧 会
 - ・この一本展 二月六日
 - 10 登山施設の改善その他登山のための適切な事業
 - ・上高地山岳研究所開所 五月〜一〇月
 - 11 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
 - ・夏山診療所開設 七月〜八月
 - ・(槍ヶ岳、五色沼、唐松、三俣山荘、白馬岳、合戦小屋、尾瀬、立山)
 - ・自然保護活動の推進
 - ・国立、国定公園内に於ける自然保護活動に協力
 - 12 海外登山の企画および指導
 - ・海外登山における無事故登山を目的に会員へ適切な指導を行なう。
 - ・機関誌などの刊行
 - ・「山岳」七〇年発行
 - ・会誌「山」第三五八号〜三六九号発行
 - ・「山日記」昭和五一年版発行
 - ・「会報」第一号〜五〇号覆刻版発行
 - ・蔵書目録発行(洋書)
 - ・「高所登山研究」発行
 - ・「この一本展」目録発行

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝

大賀二郎・

未踏の山河

倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著 <A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著 <四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著 <B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編

<A 6ポケット判>定価950円

山岳

日本山岳会編

<A 5判>

総索引 1,000円

68年	3,000円
67年	2,500円
66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈

北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著

<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行画文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著 <B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会

<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著 <四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

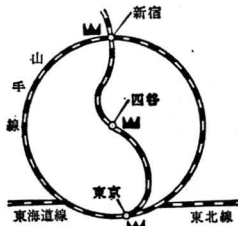
●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
たしと山と、ずから
どうしても必要なもの
をこころえこころえ
まじはさる

かたるぐンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曾根崎上-丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



会 務 報 告

四月理事会

(四月十五日午後六時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、織内副会長、板倉、伊倉、近藤、浜野、神崎、松丸、大倉、山本、田村各理事、佐藤、望月、山崎、金坂各評議員、高遠委員
▽委任 中屋副会長、宮下、原、浜口各理事

▽議案

・昭和四十九年度収支決算の件(伊倉) 昭和四十九年度の収支決算について報告、これを承認。四月二十一日に監査を受ける。

・総会提出議案の件

(板倉) 総会提出議案について説明、これを承認。

・ルーム閉室時刻の件

(板倉) 最近ルーム閉室時刻が守られていないので、一般利用は午後八時まで、委員会や行事などでも午後九時の閉室時刻を厳守するように次期役員に申送りする。

・会員章(JACマーク)登録の件(伊倉)

登録手続準備中である旨報告。了承

集 会 委 員 会 か ら

50年度集会委員会活動計画を下記の要項にて行います。

4月20日(日) 集会委員会、親睦会。明学東村山グラウンド

5月19日(月) 三三〇回 映画会。お茶の水日仏会館ホール

6月21~22日(土、日) 三三一回、現地小集会。上高地山研

8月20日(水) 三三二回、明大チューレン・ヒマール報告。

J・A・Cルーム

9月10日(水) 三三三回、専大ヒマール チュリ報告。J・A・

Cルーム

9月20日(土) 三三四回、女子エベレスト報告。J・A・Cルーム

9月30日(火) 三三五回、都岳連ダウラギリ報告。J・A・Cルーム

10月19日(日) 三三六回、集中登山。東京近辺の山にて

10月20日(月) 三三七回、静大テラムカンリ報告。J・A・Cルーム

11月20日(木) 三三八回、会員会議。場所未定。

12月19日(金) 三三九回、忘年会、J・A・Cルーム

12月21日(日) 三三〇回、モチツキ大会。陣馬山頂

1月15~18日(木~日) 三三一回、スキー親睦会。八方尾根 中大小屋

2月20日(金) 三三二回、支部懇談会 場所未定

3月20日(土) 三三三回、新入会員オリエンテーション。開催地未定

婦人懇談会から

婦人懇談会では、ガルワルヒマラヤ研究会を毎週ルームでおこなっています。詳細については近くお知らせしますが、この計画に興味をお持ちの方の積極的な参加をお待ちします。

計画 第二回日印合同婦人ヒマラヤ登山隊(ガルワルヒマラヤ峰)

実施予定 一九七六年五月~七月

連絡先 婦人懇談会 須田紀子

電話 自宅 〇四二六~四二一 〇九五六

勤務先 〇三一五八一 九一〇九

環境庁と自然保護委員会の会合

四月八日正午、湯島会館に宇野参事官、目下部計画課長、中島・土田の両氏の四名をお招きして、昼食を共にしながら種々懇談を行った。

話題は「観光道路」「林道」について、夏季の氾濫・涸沢などの過密キャンプと自然破壊・衛生との問題、再燃している上高地ケーブル、又自動車の乗入れ禁止、開発反対と地元利益との衝突、アルプスにおける山小屋の規制、登山者激増と水質汚染の問題等々、すこぶる多岐に涉ったが、お互に忌憚ない意見を交換し、今後の連絡・協力を約して、三時解散した。本会からは村井米子、大野、板倉の各委員、伊倉理事が出席した。

なお蝶ヶ岳ケーブル架設については『自然保護』一五四号の「S・O・S通信」と、日本アルプスの自然を守る会の会報(三月一日号)に詳しい記事が載っているが、本委員会としてもこうした社会情勢に逆行した計画には断然反対してゆくつもりである。

ルーム日誌 (50年4月)

- 3日(木) 指導委員会 海外連絡委員会 ナンダデヴィ委員会
- 7日(月) 集会委員会
- 8日(火) 自然保護委員会 婦人懇談会(ヒマラヤ研究会)
- 9日(水) 指導委員会
- 11日(金) 『山岳』編集委員会、集会委員会、ナンダデヴィ委員会

- 15日(火) 理事会
- 16日(水) 指導委員会
- 17日(木) ナンダデヴィ委員会
- 21日(月) 指導委員会、学生部、図書委員会、婦人懇談会(ヒマラヤ研究会)

23日(水) 昭和50年度通常会員総会、懇親会

24日(木) ナンダデヴィ委員会
四月中来室者五〇四名

会員異動

除籍取消
四五六八 小泉 昭二
五二六八 岩間 利美
退会者

四六〇五 佐藤 一英(50年4月)
一〇五〇 赤星 平馬(50年4月)
四七六三 朝日村役場山岳部(50年4月)

昭和49年度の会員異動状況

新入会員 二一三名
復活会員 一一名
退会 一〇名
物故 一七名
除籍(49年度) 八八名
昭和50年3月31日現在の会員数は三二五一名。前年度より一〇三名増。
また、昭和50年度除籍者一〇一名。